明日への架け橋
若手技術者！

インフラ維持・整備に取り組む地方公共団体や建設会社の若手技術者にインタビュー。現場からの生の声を、建設関係者やこれから建設業を目指す若者に向けてお届けします。

Vol.7

株式会社共和技術コンサルタンツ
技術部

安齋佐代子さん・花房香織さん
Sayoko Anzai　Kaori Hanafusa

設計コンサルタントの女性技術者が考える
道路設計のやりがい

道路設計は、私たちの生活基盤を支える重要な仕事です。設計者には、専門的な技術知識の習得と発注者や市民の声を反映させた柔軟な対応が求められます。

今回紹介するのは、横浜市の建設コンサルタント会社・株式会社共和技術コンサルタンツで道路設計を担当する安齋佐代子さんと花房香織さん。それぞれ異なる経歴から同社に入社し、現在は多忙な日々を送りながらも、道路設計の仕事に大きなやりがいを持ってキャリアを重ねています。具体的な仕事内容や、仕事を通じて感じる楽しさや難しさ、さらに仕事と家庭の両立を支える働きやすい職場環境などについて詳しく伺いました。設計コンサルタントの魅力や課題を知ることができる、貴重なお話となりました。

● PROFILE ●

花房香織（はなふさかおり）

1995年生まれ。長崎県出身。九州の建設コンサルタントを経て、2019年に同社に入社。趣味は友人とオンラインゲームをすること。

安齋佐代子（あんざいさよこ）

1978年生まれ。神奈川県出身。ランドスケープデザインの会社を経て同社に入社。趣味は家族とのキャンプやスノーボード。

道路設計に関する幅広い業務を担当

―入社のきっかけを教えてください。

安齋：前職ではランドスケープデザインの会社に勤めていました。結婚を機に、自宅から通いやすく、かつ業界の知識や前職で使用していたCADのスキルが生かせるということで当社を志望しました。最初はパート勤務でしたが、入社から2年後に正社員になり、現在13年目になります。

花房：私は長崎県出身で、前職は福岡の建設コンサルタントで道路設計を担当していました。建設コンサルタントは男性主体の会社が多いなか、当社では安齋さんはじめ女性の技術者も活躍しているということで、今後の人生の選択も柔軟にできるのではと思い第二新卒で入社しました。

―お二人とも道路グループで設計を担当されていますが、現在の仕事内容を教えてください。

安齋：道路や歩道の設計をメインに行っています。1つの業務は主担当と補佐の2名で担当することが多く、1人で同時に3件程度を同時進行しています。

―道路や歩道の設計は、具体的にどういったことを行うのでしょうか。

安齋：傷んだ舗装を補修したり、道路の幅を広げたりといったケースが多いです。例えば「子どもたちが使う通学路が少し狭いから広げたい」といった要望を受けて、道路を拡幅するための設計を行ったりします。

花房：横浜市内の複数箇所の小さな道路設計をまとめて受注する「管内一円業務」や、交差点の渋滞を解消するための設計、交通量が増加した道路の舗装の見直しといった業務もあります。また、都市計画道路という大きな道路の新設などもあり、この場合は都市計画の申請に必要な図面の作成などを担当します。

近隣住民の声も反映した設計案を作成

―道路を設計する場合、形状や幅などは御社がある程度自由に決定できるものなのでしょうか。

安齋：「道路構造令」という道路の新設や改築の基準を定めた法令があるため、まずはこれに則って設計する必要があります。そのうえで現場の条件やコスト、工期を考慮して、いくつかの案を出していきます。

―作成する案にはどのようなバリエーションがあるのでしょうか。

花房：まずは道路構造令を遵守した案が1つ。このほかに、近隣住民の方からの要望を踏まえた案もいくつか考えます。通学路があるとか、道端にお地蔵さんがあるといった場合は、それらを避けた設計案を複数作成します。

―設計に市民の声が反映されるんですね。

安齋：発注者からは市民の方の意見を事前に教えていただけるので、設計の前提条件として「ここは避けて考えてほしい」と言われることもあります。また、設計の前には実際に現地に行って状況を確認するので、自分たちから提案することもあります。

―仕事をしていてやりがいを感じるのはどんな場面ですか。

安齋：成績評定で評価が良かった時や、発注者から直接感謝の言葉をいただけた時は嬉しいですね。

花房：私は図面でしか見ていなかった道路などが実際できあがると、「自分が作ったんだ」という実感がわきます。現地で写真をたくさん撮ったりしてしまいます。

安齋さん、花房さんが在籍する道路グループで手掛けた道路設計の例。発注者や地元住民の声も反映しながら、整備計画を立てていく。

――逆に、仕事で難しさを感じた経験はありますか。

安齋：いつも行っている設計ではなく、通常は施工会社さんが行う施工計画をメインとした設計を担当したことがありました。当社で担当している予備設計や詳細設計でも数量は出しますが、施工計画では工事に直結する、より詳細な数量を出します。施工計画はこうした数量出しもいつもと勝手が異なるので、難しさを感じました。

花房：道路の予備設計として受けた業務が、蓋を開けてみれば都市計画の申請図書を作成する業務だったということがありました。受注した時点で想定していなかった業務をやらなくてはいけなくなったので、その時は大変でしたね。それは上司に協力してもらい設計変更をお願いすることになったのですが、かなりバタバタした記憶があります。

――仕事をする上で心掛けていることを教えてください。

安齋：大きな案件では業務期間は1年程度あるので、業務が集中する時は前倒しで進めて少し余裕を作るなど、ペース配分に気を付けています。また、資料を作成する際には自分が説明しやすいものを作るようにしています。「なぜそうなったのか」という質問をされて、「協議で決まったから」という答えでは理由にはなりません。ですから、決定した経緯も含めて打ち合わせの時には必ず資料に残すようにしてます。こうしたことに気を付けていると、業務の最後に報告書を書く際にも役立ちます。

花房：私も報告書を見据えた資料作成を心掛けています。図面などは業務進行中にも意識的にフォルダに保存しておけば、報告書も効率的に作成できます。また資料作成にあたっては、上司から「言いたいことは全部書いて」と言われたことがあり、それを守っています。例えば複数の案を提案する場合、それらの違いを資料にも明記しておけば発注者への説明漏れがなくなりますし、打ち合わせもうまくできるようになってきたと思います。

道路グループには10名程度が在籍し、グループ内で定期的にミーティングが行われている。調査のため現地に出かけることもあるが、身近な道路を扱う分「打ち合わせの後にそのまま現地調査に行けるのはありがたいです」と安齋さんは笑う。

ワークライフバランスを充実させる働きやすい環境

――お二人が考える会社の良いところを教えてください。

安齋：各自の裁量に任せてくれるところです。自分で仕事をコントロールできるのであれば、ワークライフバランスをうまく取ることができます。

花房：前職では「お休みを取っていいですか」と聞きづらい雰囲気があったのですが、当社ではそういったことはありません。

――御社では女性も多く活躍されていますが、働きやすい環境が整っているのでしょうか。

安齋：コロナ禍を機に、在宅勤務ができる環境が整備されました。私は小学生の子どもが2人いるので、週に1、2回は在宅勤務をしています。特に子どもが保育園に通っているときは送り迎えもあったので、通勤時間がないだけでも気持ちに余裕が持てました。土日に数時間だけ自宅で働くこともできるので、非常に助かっています。

――安齋さんは会社で初めて育児休業を取得されたそうですが、仕事と家庭の両立で苦労されることはありましたか。

安齋：産休を取得する際には会社からは祝福してもらいました。また育休終了時も復帰しづらいといった雰囲気は全くなく、復帰後しばらくは時短勤務をしていました。ただ、子どもたちが小さい頃は両立に苦労する時期があり、周りに置いていかれるような感覚になることもありました。自分では必死に両立しているつもりだったのですが、今考えれば仕事に集中しきれていない面もあったと思います。今は子どもも手がかからなくなってきたので、また仕事に注力できるようになってきたと感じています。

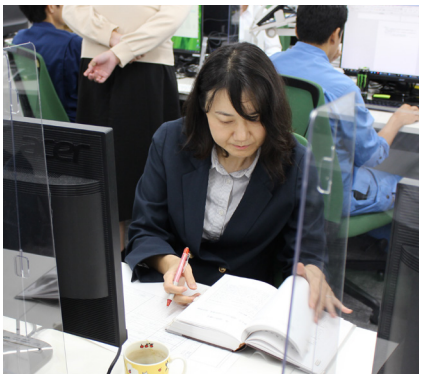
――花房さんは、先輩である安齋さんの仕事ぶりを参考にされることはありますか。

花房：同じ案件を担当したことはないのですが、過去に安齋さんが作られた資料などは参考にしています。丁寧に作り込まれていて、欲しかった情報が分かりやすくまとまっているので勉強になります。また、自分の担当している案件で悩んだ時は相談に乗っていただ

くこともあります。

――設計コンサルタントでは資格取得を推奨される場合も多いと思います。会社からのバックアップなどはありますか。

安齋：私は一昨年に管理技術者になれる資格を取得しましたが、会社からバックアップをしてもらいました。試験費用は会社が出してくれましたし、試験には論文もあるのですが、上司が講師役になって論文の添削をしてくれるなど、とてもお世話になりました。また、



残業をすることもあるが、自分の仕事が終われば定時に帰れることが多いそうで、「前職に比べると働きやすくなった」と２人は声を揃える。

その際は一緒に受験する同僚も5名ほどいたので、心強かったです。

DX推進で変わる建設業界の働き方

――建設業界は長年３Kと言われ働きづらさがクローズアップされてきました。御社では在宅勤務を取り入れるなど働き方が見直されているようですが、今後業界にはどのような動きを期待しますか。

安齋：WEB会議なども導入前は難しいと思われてましたが、今では社内で普通に行われています。ただ、発注者との間ではWEB会議はあまり使われないので、今後はこうしたDXがもう少し進めばいいなと思います。

花房：私もDXが進めば働き方も変わっていくと思います。先日は現地調査で360度カメラを使用しましたが、「計測していない所があった」と何度も現場に行くようなことがなくなるので、業務効率化が進むのではないでしょうか。

――今後の目標を教えてください。

安齋：一昨年管理技術者になれる資格を取得し、今年初めて管理技術者として案件を担当しています。これまでの担当者という立場とは異なり、市や県、国といった発注者へ対応する場面も各段に増えるため、プレッシャーは大きくなりますが、責任を持って業務に取り組んでいきたいです。

花房：今後は災害復旧に携わってみたいという目標があります。また私は今年からリーダーになったので、後輩やパートの方に仕事をお願いするというのを今練習中です。自分がこれまでやっていた仕事を、お願いする方の力量も見極めながらうまく割り振りしていくというのがこれからの課題になると思っています。

――これから土木分野を目指す人にアドバイスをお願いします。

安齋：私は前職でのCADの経験を生かして当社に入社しましたが、初めは技術者として分からないことだらけでした。ただ、経験してきたことや学んできたことがつながって、ある時パッと理解できるような瞬間がありました。学生時代に土木を専門的に学んでいなくても、仕事を通じて知識を身に付けたり、成長できる機会はたくさんあると思います。

花房：私も大学では生物環境学科で森林保護について学んでいたので、土木の基礎知識があったわけではありませんでしたが、周りから教えてもらうことで経験を重ねてきました。少しでも土木分野に興味があれば、ぜひ挑戦してほしいと思います。

（取材日：２０２４年10月）

● 取材後記 ●

安齋さんと花房さんのお話からは、自分で工夫しながらインフラを作っていける、設計コンサルタントという仕事の面白さが感じられました。また、柔軟な働き方ができる環境も整い、仕事とプライベートを両立しながらキャリアを築ける点も印象的です。建設業界の新しい可能性を感じられるインタビューとなりました。